

献辞

細谷章夫先生は茨城大学文理学部を1961年に卒業され、東京都立大学大学院人文科学研究科修士課程で哲学を専攻され、さらに慶応義塾大学大学院文学研究科の博士課程で哲学を専攻されました。その後母校の茨城大学の非常勤講師を経て、昭和53年（1978）に鹿児島県立短期大学に助教授として赴任され、以後25年の長きに渡って哲学や倫理学、さらには比較文化などの教育にたづさわってこられました。また昭和56年には西ドイツのミュンスター大学に研究員として1年間留学され哲学の研鑽に励まれました。

先生がご専門とされた、いかめしい感じがまわりつく哲学にも「はやりすたり」があります。戦後の実存主義から始まり、ポストモダンや現象学と色々な哲学の流行が紹介されてきました。しかし先生は終始一貫してカント哲学を問題とされてきました。本学に赴任されてから文学科長を勤められる平成8年まで、本学紀要を中心に律儀なほど毎年、「カント哲学の諸問題」についての論文を発表されてきました。その持続力は大変なものだったと思います。また1996年から開講された「比較文化」も担当され、その前後からは人間文化や宗教にも積極的な興味を持って韓国やインドネシア、あるいは鹿児島での調査研究を進めてこられました。

私は、残念なことに先生にお会いして1年にしかありません。則物主義的な私にとってはカント哲学は少々苦手なのですが、それは食わず嫌いだったのかも知れません。今は先生の研鑽のおこぼれに預かりたい気持ちです。

また先生が受け持たれた比較文化＝人の営みを通しての異なった文化の比較は、私たちが人の多様性について認識し、相互が理解することにとっての一番の基礎となる知恵でしょう。現代の人類社会は、グローバリゼーションの名の下に、自己を主張し、自己の文化と体制を力によって限りなく押し広げようとする傾向が強くなってきました。先生のような、強固な哲学的思考に裏打ちされた「比較文化論」が必要とされる時代なのです。

退職すると少しは暇になります。先生の一生をかけたカント哲学の研鑽をさらに進めていただき、毎年でも論文や紀要を人文に寄稿されることを願っています。

平成15年6月12日

学 長 堀 田 満